

国 民 統 合 と 教 育

——マレーシア・サバ州・N 小学校の変容をめぐって——

西 村 重 夫*

National Integration and Education with Special Reference to the Transformation of N Primary School in Sabah, Malaysia

Shigeo NISHIMURA*

This article aims to analyze the roles played by school education in the process of national integration. Special reference is made to N Primary School, which is located in one of the farthest villages from Kuala Lumpur. Between my first visit to N Primary School in 1973 and my second visit in 1991, two kinds of transformation are apparent in the intervening 18 years of development of this school: Malaysianization and Islamization.

The process of national integration in school activities can be seen not only in the revisions of educational policy and the national curriculum but also in such small changes as in school uniform and the layout of the classroom. The dynamics of Islamization can be also recognized not only in the teaching of "Islamic Education" but also in such minor considerations such as the pasting on walls of notices about Al Qur'an. In this sense the school can be called "a tool of national integration."

All the pupils and teachers except one teacher of N Primary School are Kadazans, speaking the Kadazan language and maintaining the traditional Kadazan culture. For this reason, conflict between national identity and minority identity poses one of the most serious and important problems in N Primary School.

はじめに

N 小学校は、東南アジア最高峰であり、「神の山」として信仰の対象とされるキナバル (Kinabalu) 山の麓にある小さな学校である。地理的にはボルネオの北東部、行政的にはマレーシアのサバ州に位置する。ボルネオは、世界で三番目に面積の大きい島で、北部三分の一がマレーシア領 (サバおよびサラワク) とブルネイ王国、南部の三分の二がインドネシア領 (カリマンタン) からなる。一つの島に三つの国家が存在する点が注目されるが、N 小学校はそのうちのマレーシア・サバ州に位置する。サバ州そのものの歴史は浅く、1963年にイギリスの統治

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

から脱し、マレーシア連邦に加入した。マレーシア加入からちょうど10年目の1973年、N 小学校を訪問した。赤道直下を照らすまばゆいばかりの太陽のもと、子どもたちが活発に遊び、学び、働く姿が認められた。¹⁾ それからさらに18年を経過した1991年、N 小学校を再訪した。²⁾ N 小学校周辺の景観それ自体の変化に比べ、N 小学校そのものの変容には、目を見張るものがあった。それを一言でいえば、教育のマレーシア化であり、学校が国民統合の装置として機能している点であった。

本研究は、N 小学校の教育活動というミクロな問題を題材として、国民統合と教育の関係というマクロな問題に接近しようとするものである。学校、教室、授業という具体的な事象を手がかりとして、国民統合の動態を読みとることが第一のねらいとなる。繰り返すと、教育活動の実際からマレーシア人の育成というダイナミクスに迫ることをめざす。第二のねらいは、1973年から1991年に至る時間的経過から、国民統合の過程を読みとることである。それぞれの訪問期間に作成した授業観察記録を比較することにより、N 小学校の教育が国民統合に作用するプロセスを明らかにしていきたい。

比較教育学の研究法によってアジアの教育を研究する場合、これまで教育法規、教育制度、教育行財政といった制度論的な視点からの研究が主流をなしてきた嫌いがある。もちろん、国そのものを対象とするマクロな研究の重要性を認めないわけではないが、それだけでは、生き生きとした教育の営為を読みとることは困難である。教育の動態的側面を考察するには、教育人類学や「比較教育風俗」研究³⁾あるいは「教育生態学」研究⁴⁾のようなミクロな視点からの研究手法が有効であると考えられる。本研究では、教育の具体的な事実から出発して、学校教育の変容をトータルに把握することをめざしていきたい。

I N 村の変容

N 村は、マレーシア・サバ州、内陸部ラナウ (Ranau) 地区の北方にある小さな村である。民族的には、大部分がカダザン (Kadazan) 人で占められる。

周知のとおり、マレーシアについても、サバ州についても、多民族社会であるという視点を避けて論じることはできない。面積33万 km²、人口1,800万人であるマレーシアの民族構成は、

-
- 1) 最初のN 村滞在は、1973年3月20日から3月31日までの期間である。そのときの記録は[西村 1973]に収められている。
 - 2) 1991年8月7日および8月14日、15日にN 村を再訪した。さらに1992年9月16日にもN 村を訪れた。
 - 3) 比較教育風俗研究会(研究代表者: 大阪市立大学石附実教授)の研究成果は、[比較教育風俗研究会 1991-1992]に収められている。
 - 4) 1993年7月9日に神戸市で開かれた比較教育風俗研究会において、筆者は「『教育生態学』の可能性」と題する研究発表を試みた。「教育生態学」研究としては、[Eggleston 1977; Goodlad 1987; Orr 1992]があげられる。

マレー系に先住民を含めたブミプトラ (Bumiputera) が59%、中国系が32%、インド系が8%、その他が1%である。単純化して言うならば、マレー系は、マレー語 (マレーシア独立後、マレーシア語と呼ばれる) を用いてイスラームを信仰し、中国系は、中国語を用いて儒教・道教・仏教あるいはキリスト教を信仰し、インド系は、タミル語などを用いてヒンドゥー教を信仰するという図式で示されるように、それぞれの民族集団が独自の社会を築いている。

サバ州に目を転じると、民族構成は同様に複雑である。ボルネオ東部に位置するサバ州の面積は8万 km²、人口は150万人である。政治的にはいわゆるブミプトラに括られるが、半島部マレーシアのマレー系とは異なる先住民が最大数を占める。もっとも多いのがカダザン人であるが、そのほか、内陸部に住むムルト (Murut) 人、海洋民族バジャウ (Bajau) 人などがある。サバ州全体の人口に占めるそれぞれの比率を示すと、カダザン人が28%、ムルト人が5%、バジャウ人が12%である。一方、マレーシア全体ではマジョリティであるマレー人の比率は3%ほどであり、サバ州では逆にマイノリティになる。サバ州の先住民にマレー人を加えたブミプトラの占める比率は、83%ほどになる。一方、サバ州においてインド系はきわめて少ないが、中国系は16%程度を占め、都市部を中心に居住する。⁵⁾

地図から分かるように、サバ州は、南はインドネシアに隣接し、北部、東部はスルー海を通してフィリピンに接する。そのため、サバ州には、合法、非合法の違いはあれ、きわめて多



地図 サバ州の位置図

5) マレーシアおよびサバ州の民族構成に関しては、[Hairi 1989; Nor 1982; Salleh 1992] を参考にした。

くのインドネシア人やフィリピン人が居住する。それがサバ州における民族構成をさらに複雑なものにしている。

宗教の側面からサバ州の社会を捉えると、イスラーム、キリスト教、土着の宗教⁶⁾の三つに大きく分かれる。イスラームは、バジャウ人やマレー人の宗教であるが、近年、カダザン人の間にもイスラームは急速に広まってきている。キリスト教は、サバ州が北ボルネオと呼ばれ、イギリスの植民地であった時代からカダザン人の社会などに普及していたが、現在もなお、その勢力は拡大している。イスラームとキリスト教の相対的な増大に比べ、土着の宗教の信仰者は統計上激減している。しかし実際には、統計的にイスラーム人口やキリスト教人口に数え上げられている人々の中に、土着の宗教を信仰している人が数多く存在している。

さて、サバ州におけるN村の位置づけをみてみよう。地図に示したように、N村は、ラナウの北東30 kmに位置する。ラナウは、ボルネオの北東部を走るクロッカー山脈(Banjaran Crocker)の盟主キナバル山(標高4,101 m)の東部に位置し、カダザン人居住の一大中心地である。N村は、行政的にも、経済的にもラナウの圏内にあり、その標高は500 mほどである。キナバル山に源を発し、村の北部を流れる川が形成した沖積平地が水田として利用され、山際の高台が集落となっている。

1973年に初めて訪れた時のN村の景観は、田園とヤシ、高床式の家屋に象徴されるものであった。高床式家屋の多くは、壁材、床材が竹を割って平板にしたものででき、屋根はニッパヤシを編んだものからできていた。そのため、ヤシの見える光景とあいまって、N村は「竹とヤシの景観」として捉えられた。

N村は、家屋数が約30戸、人口およそ200人であったが、小学校教員の1戸を除いたすべてが農家であった。各戸ごとに水田をもち、稲作が中心的な生業となっていた。山の斜面には焼畑があり、キャッサバなどの根菜類が栽培されていた。村の中を徘徊する家畜の群れも、N村の景観の一部となっていた。水牛は、水田耕作に使役されるが、農閑期には村の中に放牧されていた。ブタ、ヤギ、ニワトリは食肉用として飼育されていた。

1991年に再訪した時、N村の景観は変わらないものとして目に映じたが、よく観察すると、いくつかの変化が認められた。第一に、竹製の壁と床、ニッパヤシの屋根からなる家屋は減少し、新しく建てられた家屋のほとんどは、木造の壁と床、トタン屋根からできていた。第二に、焼畑耕作があまり行われなくなり、高地に位置する地理的条件を利用してキャベツ、レタスなどの高原野菜が栽培されるようになった。村には小型トラックを保有する家もあらわれ、収穫された野菜や果物は、トラックやミニバスでラナウの市場へ出荷されるようになった。第三の

6) 土着の宗教は[Nor 1982]ではpaganと表わされているが、N村ではタピコーンと呼ばれていた。paganは、キリスト教、イスラーム以外の偶像信者を意味する。

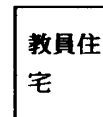
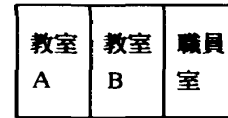


図1 N 小学校の教室配置図 1973年

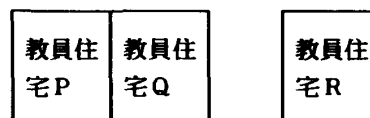
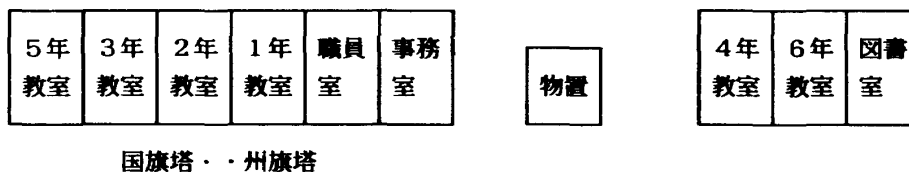


図2 N 小学校の教室配置図 1991年

変化は、ブタの姿が村から消えたことである。放牧された水牛が悠々と草を食べている光景が18年前と変わらない点とはまったく対照的であった。ブタの姿が見えないのは、ブタを禁忌とするイスラームの勢力が拡大したことの証拠である。N村には、新しく木造の礼拝所が設けられていた。

II N 小学校の変容

N 小学校は、サバ州がマレーシアに加入して2年が経過した1965年にN村の西端に設立された小学校である。マレーシアの初等教育制度は、マレーシア語を教授用語とする国民学校 (Sekolah Kebangsaan) と中国語またはタミル語を教授用語とする国民型学校 (Sekolah Jenis

7) 国民学校 (マレーシア語)、国民型学校 (中国語)、国民型学校 (タミル語) の児童数における比率は、マレーシア全体が73:24:4であるのに対し、サバ州は、86:14:0である [Kementerian Pendidikan Malaysia 1991: 25, 30]。

表1 N小学校の児童数

[()の数字は、ムスリム児童数、ただし、内数]

年 学年	1973年			1991年		
	男子	女子	計	男子	女子	計
1	8	5	13	11 (10)	12 (3)	23 (13)
2	2	1	3	12 (8)	5 (5)	17 (13)
3	2	3	5	13 (9)	6 (2)	19 (11)
4	6	4	10	12 (9)	4 (3)	16 (12)
5	4	0	4	13 (8)	8 (5)	21 (13)
6	12	4	16	6 (6)	5 (0)	11 (6)
計	34	17	51	67 (50)	40 (18)	107 (68)

Kebangsaan)に分かれる⁷⁾が、N小学校は国民学校である。

1973年の時点では、図1に示したように、二つの教室と職員室からなる校舎が一つ設けられていた。この校舎は、木造、トタン屋根で、ガラスの窓があったが、当時の一般家屋にはガラス窓は備えられていなかったため、N村の近代化を象徴する建物である印象を与えた。土間式の校舎に隣接して、高床式の教員住宅が一軒建てられていたが、そこにはS先生の家族が生活していた。

1991年に再び訪れると、N小学校は見違えるようになっていた。図2に示したように、古い校舎の西側に木造で高床式の校舎が新しく建築された。古い校舎は、二つの教室と図書室兼教材準備室からなる。一方、新しい校舎は、4つの教室と職員室、事務室の6室からなり、古い校舎の2倍の規模である。教員住宅は、前からある住宅の東側に新しく一棟が設けられた。教員住宅Pには、独身の女性教員であるN先生とZ先生が住み、教員住宅Qには、女性教員のA先生が公務員である夫と子供と住んでいた。一方、古い教員住宅Rには、単身赴任の男性教員G先生と独身の男性教員L先生が同居していた。

児童数の変化は、表1に表わしたとおりである。1973年に51人であった児童数は、1991年には倍増し、107人になった。男女の比率は、1973年には、男子が34人、女子が17人であり、男子がちょうど女子の2倍であった。1991年になると、男子が67人、女子が40人となり、男女比は63:37と、女子の比率が増加した。1973年当時、女子の就学は低迷していたが、1991年になると、男女の格差がある程度是正されてきたことが分かる。しかし、女子の就学率が依然として低いことに変わりはない。学年別に女子児童数を見ると、学年があがるにつれてその数は減少している。女子は家庭の労働力として期待されることもあり、中途退学の傾向が男子よりも高い。一方、1973年の児童数のうち卒業学年の6年生が多いのは、最終学年で原級に留め置きされることが原因であると考えられる。実際、当時の6年生の年齢には、11歳から15歳までの幅が認められた。正式な統計はないが、民族的には、両時点とも全員がカダザン人である。

表2 N 小学校の教員構成

1973年	E (男) 校長, 2年, 5年, 6年担当 S (男) 1年, 3年, 4年担当	計2名 (男2名)
1991年	J (男) 校長 R (男) 教頭, 6年担当 G (男) 1年担当 A (女) 2年担当 N (女) 3年担当 L (男) 4年担当 P (男) 5年担当 U (男) 宗教教育担当 F (女) 助教諭 Z (女) 助教諭	計10名 (男6名, 女4名)

1991年のものしか明らかではないが、児童の宗教別の統計がある。男子67人中の50人、女子40人中の18人がイスラームを信仰している。その他はキリスト教を信仰するとあり、土着の宗教を信仰する者は統計上ゼロである。男女の間に大きな違いはあるが、全体として107人中68人がムスリム（イスラーム信仰者）であり、その占める比率は64％に達する。1973年の統計がないが、その当時、各家庭の宗教信仰は、イスラーム、キリスト教、土着の宗教の三者がおおよそ同数であった。単純な比較はできないが、この18年間にムスリムの数が大幅に増加したことは否定できない。また、N 小学校の統計によれば、土着の宗教の存在は消滅している。

教員数は表2に示したとおりであるが、1973年の教員数は、わずかに二人であった。二人の教員で6学年を担当するわけであるから、一人が3学年を受けもつ複々式学級の編成を余儀なくされた。校長を兼務するE先生が2年と5年と6年を担当し、もう一人のS先生は1年と3年と4年を担当した。いずれも男性である。1991年になると、教員の数は、一挙に10人に増えた。内訳は、男性が6人、女性が4名である。複々式学級編成は解消され、各学年がそれぞれの教室をもって、担任の教員がついた。しかし、学級担任が全教科を担当するのではなく、教科担任制がとられた。宗教教育に関しても、専任の教員が一人配置されていた。若い二人の女性教員は、1952年に設立されたサバ州で最も歴史の古い教員養成機関であるケント教員養成カレッジ (Maktab Perguruan Kent) に在学中のまま助教諭として採用されていた。

教員の民族別構成は、男性で一番年少のL先生がバジャウ人であるほか、残りの9人はカダザン人である。L先生は、バジャウ人の居住地であるサバ州北端部のクダット (Kudat) 出身であり、ケント教員養成カレッジを卒業してN 小学校に赴任してきていた。他の9人は、いずれもラナウ周辺の出身である。宗教的には、10人全員がムスリムであり、キリスト教や土着の宗教を信仰していると回答する者はいなかった。

N 小学校の18年間における変容には、二つの方向性が認められる。一つは、校舎の拡張や児

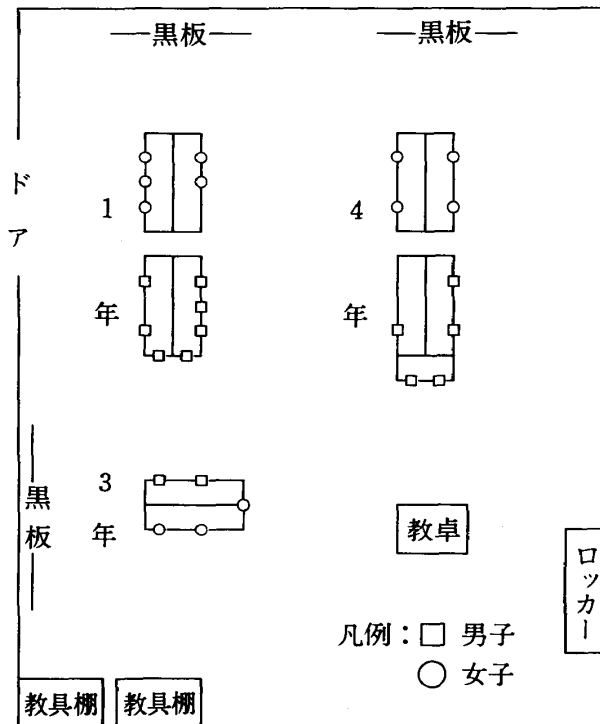


図3 教室Bの座席配置図 1973年

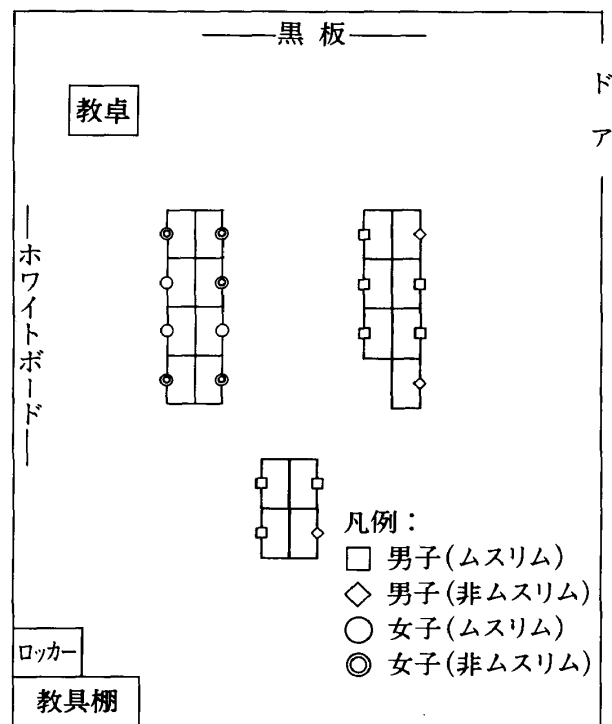


図4 5年教室の座席配置図 1991年

童数、教員数の増加にみられる教育の量的拡大である。サバ州全体についてみても、1970年代から1980年代にかけて初等教育の普及は顕著である。⁸⁾ もう一つは、ムスリム児童数の増加あるいはカダザン社会のN村におけるバジャウ人教員の採用に示される教育の質的变化である。小学校におけるイスラーム化および国民統合化とでも表現できる変化である。

III 教室の変容

1973年時点における教室の特色は、何よりも複々式学級編成が採用されたことである。図3には、図1に示す教室Bの座席配置図を表わした。教室の一つの面に二つ、その側面に一つの黒板が据えられている。それぞれの黒板に向かって、学年ごとの机と椅子が配置されていた。ただし、一部を除き、児童は向かい合わせに座っていた。児童の数がわずか5人の3年生は男女が混合しているが、1年生と4年生の場合は、男子と女子が別々の机の前に分かれて着席した。教卓が黒板のないコーナーに設置され、教具棚やロッカーも備えられていた。

8) サバ州における小学校の数は、1970年に695校であったのが、1985年には908校に増加している [Hairi 1989: 55]。

1991年になると、教室は一つの学年が占有できるようになった。5年生の教室を示したのが図4である。黒板が教室の前面に備えられ、側面にはホワイトボードが掛けられた。教卓は両者の間のコーナーに設置され、教具棚とロッカーは教室の後方に備えられた。机と椅子の配置であるが、児童が向かい合わせに座る方式は1973年の時点と変わっていない。三つのグループに分かれているが、そのうち二つは男子のグループで、一つは女子のグループである。1983年から改訂されている小学校新カリキュラム (Kurikulum Baru Sekolah Rendah, 略称はKBSR) には、教室の配置モデルが示され [Kementerian Pelajaran Malaysia 1983: 18-22], 児童の習熟度別にグループを編成して座席を配置することが勧められている。N 小学校5年の教室の場合、前方にある男子のグループと女子のグループが学力の進んだグループであり、後方の男子4人のグループが学力の遅れたグループであるとの説明があった。図4ではムスリムの児童とムスリムでない児童を違う記号で表わしているが、両者は混じってグループを構成している。

教室の掲示物に着目するとしよう。1973年の教室には、先生が描いた飛行機の絵、カエルが虫を食べようとする絵、1から100までの数字を書いた表が掲示されていた。教具棚には、10 cm 位に切った竹ひごが10本ずつ束にしたものが並べられていた。

1991年における5年生の教室には、さまざまな掲示物が認められた。教室の正面を見ると、黒板の上にマレーシア国王と王妃(当時)の写真が貼られ、黒板の横には、時間割、カレンダー、児童の役割分担表、印刷物の「教育ニュース」(Berita Pendidikan) が掲示されていた。教室の側面には、ホワイトボードの横にコーランの章句(第2章11節)をアラビア語で記した色紙が貼られていたが、これは宗教教育の授業で用いられた教材であった。教室の後の面には、マレーシアの地図、半島部マレーシアの地図、サバ州の地図、マレーシアの行政組織図、生態系図、ビタミンの種類をあらわした表のほか、児童の作品である貼り絵が掲示されていた。生徒の貼り絵を除いた掲示物はすべて、「自然と人間」という教科に関連した教材である。国王と王妃の写真、マレーシアの各種の地図に示されるように、教室の掲示は、マレーシアという国そのものにアクセントが置かれていた。

児童の服装も、教室の風景を彩るものである。1973年に見られた服装は、男子の場合、綿の半袖シャツに半ズボンが大半であったが、ほころびや繕いのある服が目についた。高学年の児童になると、白いシャツに紺色や黒の半ズボンを着用する者が大半であった。女子の場合、白いブラウスに制服風のジャンパースカートをはいっている者が多かったが、低学年になると、色があせているとはいえ、カラフルな色彩のワンピースを着ている者の数がめだった。男女とも、裸足の者と草履をはいている者がそれぞれほぼ半数であった。

1991年になると、5年生の全員が制服を着用していた。男子は白い半袖シャツに紺色の半ズボン、女子は白い半袖のブラウスに紺色のジャンパースカートで統一されていた。ほとんど全

表3 5年生の週あたり授業時間数

(単位は分)

教科名	教育課程 1968年	N 小学校 1973年	教育課程 1983年	N 小学校 1991年
マレーシア語	360	360	420	330
英語	200	120	270	210
算数	160	200	240	210
イスラームの知識	120	0	—	—
イスラーム／道徳	—	—	150	180
理科	120	120	—	—
公民	40	40	—	—
歴史	80	80	—	—
地理	80	80	—	—
自然と人間 (AM)	—	—	210	240
保健体育	80	160	—	60
図画工作	80	80	—	60
音楽	—	—	—	60
芸術・レクリエーション	—	—	150	—
集団活動	120	—	—	90
校長の選択教科	(200)	—	—	—
計	(1640)	1240	1440	1440

注) 1968年の教育課程は、[Ibrahim 1977: 102] に基づいて作成。

1983年の教育課程は、[Kementerian Pelajaran Malaysia 1983: 7] に基づいて作成。

員が靴をはいていたが、一部草履ばきの者もいた。5年の教室では見られなかったが、3年生や6年生の中には、髪をスカーフで覆い、手首と足首まで隠れた服装をした女子がいた。いわゆるジルバブ (jilbab) と呼ばれるムスリム特有のスタイルで、1973年時点には見られなかったものである。いずれにせよ、18年の間に、制服による学校の一体化、ひるがえって国民としての一体化が図られてきている。

以上、N 小学校における教室の変容を、座席の配置、掲示物、児童の服装の三つの側面から捉えようとした。1, 3, 4年の複々式学級と5年単独の学級を単純に比較するわけにはいかないが、マレーシア関係の地図の掲示や児童の制服に示されるように、マレーシアへの一体化というベクトルがN 小学校にも表われているのが感じ取られた。それと同時に、コーランの掲示物、ジルバブの着用に表わされているように、イスラーム化というベクトルもN 小学校には認められた。

IV カリキュラムの変容

N 小学校の1973年と1991年の間におけるカリキュラムの変容をたどるには、それぞれの時点で実施されているマレーシアの教育課程に着目する必要がある。表3には、1968年教育課程とN 小学校の1973年におけるカリキュラム、1983年教育課程とN 小学校の1991年におけるカリキュラムのそれぞれについて、5年生の週あたり授業時間数を並べた。教科を4つのカテゴリーに分けてあるが、これは1983年小学校教育課程に示されている教科群に基づいたものである。

1968年のマレーシア小学校教育課程 [Ibrahim 1977: 102] には、数多くの教科が列挙されている。全部で12の教科があげられ、中には「校長の選択教科」のように、校長の自由裁量で決められる教科が設けられていた。

しかし、1973年にN 小学校で行われていた授業では、校長の選択教科も集団活動も時間割には表われてはいなかった。「イスラームの知識」(Pengetahuan Agama Islam)も設定されなかったが、これはイスラームについて教授できる教員が存在しなかったためである。マレーシア語は、1968年教育課程と同じ数の時間が実際にも設けられた。算数の授業時間数は1968年教育課程より多かったが、英語の授業時間数は少なかった。1973年の時点において、英語を教える能力のある教員が存在しなかったのである。授業時間割に英語の授業時間が設定されていたが、実際には授業は行われず、他の教科に振り分けられていたのが実態であった。理科、公民、歴史、地理、図画工作の授業時間は、1968年教育課程とN 小学校の時間割が同数であったが、保健体育に関しては、実際の授業時間数のほうが多かった。

1983年にマレーシアの小学校教育課程は全面的に改訂されたが、改訂内容⁹⁾を検討すると、三つのねらいが認められる。第一は、児童の基本的能力(読み書き算数)の向上である。コミュニケーション分野(Bidang Komunikasi)に含まれるマレーシア語、英語、算数の三つの教科は、いずれも1968年教育課程に比べ授業時間数が増加した。第二は、理科や社会科(公民、歴史、地理)に関する教科が「自然と人間」(Alam dan Manusia)という一つの教科に統合されたことである。それによってもって、理科や社会科に係る授業時間数は減少した。第三は、価値教育の強化である。1968年教育課程では、「イスラームの知識」という教科が設けられ、ムスリム児童を対象に週120分の授業が行われた。しかし、非ムスリムの児童には、学校において自らの信仰する宗教教育を受ける機会は提供されず、ムスリムの児童が宗教教育を受けている時間は、各自の母語学習にあてられた。1983年の小学校教育課程改訂によって、イスラームの知識は、週150分の「イスラーム教育」(Pendidikan Agama Islam)という教科となり、非ム

9) [Kementerian Pelajaran Malaysia 1983]。1983年教育課程については、[杉本 1989] が詳しい。

年表 マレーシア、サバ州教育年表 (1945～1991)

マレーシア一般	マレーシアの教育	サバ州の教育
45 イギリス軍政施行 48 マラヤ連邦発足	49 マラヤ大学(シンガポール)設立 51 バーンズ報告： 二言語主義 (㊟+㊞) 51 フェンウー報告： 三言語主義 (㊟+㊞+㊤) 56 ラザク報告：標準学校 (㊞) と 標準型学校 (㊟+㊤+㊤) 59 マラヤ大学 (クアラルンプール) 設立 60 ラーマンタリブ報告： 国民学校 (㊞) と国民型学校 (㊟+㊤+㊤)	52 ケント教員養成カレッジの設立 55 ウッドヘッド報告：学校制度の 統合 56 教育局の設置
57 マラヤ連邦独立		
63 マレーシア連邦結成 (サバ加入) 65 シンガポール分離独立 69 5月13日事件 (人種暴動) 70 ルクヌガラ発表 71 ～ 新経済政策 (プミプトラ政策) 81 ルツクイーストボリシー 東方重視政策 91 ～ 国家開発計画 (2020年構想)	67 国語法の成立 70 マレーシア国民大学設立 70 ～ 国民型学校 (㊟) が国民学 校 (㊞) に移行 76 ～ すべての中等学校の教授 用語がマレーシア語に 79 マハティール報告：道徳教育 の特設 83 国際イスラーム大学設立 83 ～ 小学校新カリキュラム 89 ～ 中等学校新カリキュラム 89 「国民教育哲学」の発表	63 ガヤ教員養成カレッジの設立 *65 [N 小学校開校] 66 サバ財団の設立 68 サバ州最初のマレーシア語中等 学校 *73 [N 小学校第1回訪問] 73 サバ初級教育資格が LCE に変更 73 マラ工科大学サバ分校の設立 74 マレーシア国民大学サバ分校の 設立 75 海外学校教育資格が MCE に変 更 83 ～ 小学校新カリキュラム 89 ～ 中等学校新カリキュラム *91 [N 小学校第2回訪問]

注) ㊟は英語, ㊞はマレイ語(マレーシア語), ㊤は中国語, ㊤はタミル語をさす。マレーシアの教育の歴史的展開については, [村田 1989] が参考になる。

スリムの児童を対象としては、「道德教育」(Pendidikan Moral) が設定されるようになった。

N 小学校の1991年における時間割は、1983年教育課程に準拠するものであるが、いくつかの違いが認められる。第一は、基本的能力の向上をねらいとするコミュニケーション分野の授業時間数が少ないことである。マレーシア語、英語、算数の授業時間数はいずれも、教育課程で設定された時間数より2割程度少なかった。第二は、自然と人間、イスラーム教育または道德教育を含む「人間とその環境」分野 (Bidang Manusia dengan Alam Kelilingnya) の授業時間数が多いことである。N 小学校では、人間と神、人間と自然、人間と社会との関係を内容とする分野の授業が重視されていたことが分かる。第三は、個人の発達分野 (Bidang Perkembangan Diri Individu) に属する芸術・レクリエーション関連の教科が保健体育、図画工作、音楽、集団活動として設定され、その授業時間数が多かったことである。

最後に、1973年と1991年の間に N 小学校のカリキュラムについて、どのような変容が認められるかを整理しておこう。まず、18年の間に授業時間の総数が増えたことがあげられる。1973年の1,240時間が1991年には1,440時間であるから、16%の増加になる。

次に注目されるのは、ムスリムの児童に対してイスラーム教育、ムスリムでない児童に対して道德教育が特設され、価値教育が重視されるようになったことである。理科と社会科が「自然と人間」に統合されることによって、理科、社会科関係の時間数は若干減少した。しかし特設されたイスラーム教育、道德教育を加えるならば、「人間とその環境」分野に関する授業時間数そのものはむしろ増加している。N 小学校のカリキュラムにおいて国民統合に関連した教科が重視された背景には、サバ州全体における教育行政、教育システムにマレーシア化という強い動きがあったことがあげられる。

年表を参照しながら簡単にその流れを見るならば、第一に、教員養成機関の設置があげられる。1952年にトゥアラン (Tuaran) にサバで最初の教員養成機関であるケント教員養成カレッジが設けられていたが、1963年には、コタ・キナバルにガヤ教員養成カレッジ (Maktab Perguruan Gaya) が設立された。ガヤ・カレッジは、中等学校の教員を養成する機能をもち、英語教育が重視された [Salleh 1992: 102]。第二に、教育資格のマレーシア全体としての統一があげられる。マレーシアの学校制度は、6-3-2-2制 (6年制の小学校、3年制の初級中等学校、2年制の上級中等学校、2年制の大学準備教育) である。初等中等学校の修了時に実施される試験に合格した者には初級教育資格 (Sijil Rendah Pelajaran, 略称 SRP) が与えられ、上級中等学校の修了時に実施される資格に合格した者にはマレーシア教育資格 (Sijil Pelajaran Malaysia, 略称 SPM) が与えられる。サバ州では独自に、初等中等学校修了時にサバ初級教育資格 (Sabah Junior Certificate) を取得できるようになっていたが、サバのマレーシア加入とともに、1973年には Lower Certificate of Education に変わり、1978年にはマレーシア半島部と同様の SRP となった。上級中等学校の修了時に関しては、サバ州で独自に海外学校教育資

格 (Oversea School Certificate) が受けられるようになっていたが、1975年からは Malaysian Certificate of Education と変わり、1980年から SPM となった [Omar 1981: 130]。かくして、サバの教育資格制度は、マレーシア全体として統一されるようになった。

第三に、サバにおける高等教育機関の進出があげられる。マレーシア加入後もしばらくの間、サバには高等教育機関が存在しなかった。1973年になってマラ工科大学 (ITM) サバ分校が設立され、1974年にはマレーシア国民大学 (UKM) が設けられるようになった [ibid.: 140]。ここで注目すべきことは、いずれの大学もプミプトラを対象とする高等教育機関である点である。1970年代に入って展開されたプミプトラ優遇政策の一環としての施策であり、プミプトラを中心とするマレーシア化がサバにおいて強力に推進されたのである。

V 教育活動の変容

N 小学校を最初に訪問した1973年の時点において、どのような教育活動が展開されていたか。ある日の教育活動の観察記録を見ることにする。

- 7:30 各自思い思いの服装をした児童が三々五々と登校してくる。カバンを肩にかけた子、ノートを抱えた子、手ぶらの子、様々である。
- 8:00 男子は校庭でドッジボール、女子は石のおはじきをする者が多い。6年生を中心とする数名が教室の掃除をする。二人の先生は授業の準備をしているが、途中から S 先生 (男) はドッジボールに参加する。
- 8:40 鐘が鳴ると、児童は教室に入る。
[教室 A の授業] 2年、5年、6年からなる複々式授業で、E 先生 (男) が受けもつ。授業科目は、3学年ともに算数である。まず E 先生は、6年の黒板に6つの問題を書く。例えば、「1,524個のドリアンを23人で分けたら一人あたりのドリアンは何個か」という問題である。問題を児童が読みあげたあと、E 先生は説明を加える。
- 8:55 6年に問題を解くように指示したあと、E 先生は5年の方に移動する。5年用の黒板に「 $746 + \text{???} = 1369$ 」といった問題を3題書く。この間、問題を解き終えた6年生は、ノートを教卓へ置きにくる。退屈した男子の中には、けんかを始める者もいる。相手にされない2年生は、騒然としている。
- 9:05 E 先生は2年のところに移る。まず今日の年月日を尋ねる。つづいて竹ひごで作った教具を用い、 $3 + 3$ 、 $3 + 3 + 3$ 、 $3 + 3 + 3 + 4$ の計算の仕方を説明する。繰り上がりの問題が難しいのか、時間がかかる。この間、5年生、6年生は、与えられた問題を解き終え、あるいは途中で放棄し、教室から出ていく児童も数人いる。

- 9：20 E先生は、教卓で児童のノートをチェックする。
- 9：35 ノートを6年生、5年生にそれぞれ返却する。
- 9：40 6年生の問題を解答する。児童は手をあげ、一斉に答える。
- 9：50 5年生の問題を解答する。E先生は板書しながら、児童の解答を導き出そうとする。特に騒がしい6年男子2名に注意をする。
- 9：55 6年生を対象に**マレーシア語**の授業を開始する。E先生は、プリントの文章を朗読する。読んだ内容から質問を出し、一人ひとりに尋ねる。質問にたいしては、答えがほとんど得られない。先生は重要事項を板書するが、ノートをとる者はいない。この間、2年生、5年生は、ほとんど全員が遊んでいる。数人の男子は教室の外へ出るが、先生は注意しない。
- 10：10 休憩時間。男子の多くは、学校前の広場でサッカーをする。いったん家へ帰ってしまう者も少なくない。
- 11：20 鐘がなり、児童は教室に入る。
[教室Bの授業] 1年、3年、4年からなる複々式授業で、S先生が受けもつ。S先生はまず、1年生を対象に**算数**の授業を始める。黒板に円を描き、その中に何人かの絵をかく。児童を指名し、円の中の人数を答えさせる。
- 11：35 4年生を対象に**マレーシア語**の授業を始める。黒板に山や家、田畑の絵を描いて、「ブルネイ村に住む身よりのない少年」の話をする。教科書は用いない。この間、1年生は算数、3年生はマレーシア語の問題を解き、そのノートを教卓に提出する。しかし、教室は騒がしくなり、歌を歌いだす者もいる。4年生に課題を与える。
- 11：50 S先生は、教卓に戻り、1年生と3年生のノートをチェックする。
- 11：55 3年生を対象に**マレーシア語**の授業を始める。一人ひとりを立たせ、マレーシア語の綴りを質問する。
- 12：10 隣の教室からE先生が入ってきて、1年と4年の出席をとる。3年の授業は続行し、S先生はマレーシア語の文を完成させる問題を課す。
- 12：15 S先生は、1年生に算数のおさらいをする。一桁の数字を書いたカードを示し、それに答えられた者から下校を許す。
- 12：25 つづいて3年生を相手にマレーシア語のおさらい。マレーシア語の綴りを正しく言えた者から順に帰宅を認める。
- 12：30 最後に4年生対象にマレーシア語のおさらい。S先生がマレーシア語で質問し、それに答えられた者から帰る。
- 12：35 B教室の最後の一人が下校する。S先生も、N小学校に隣接する教員住宅へと帰る。

1973年におけるN小学校の教育活動を振り返るとき、複々式学級編成がもたらす問題点が第一に浮かびあがってくる。一人の教員が三つの学年を担当するのであるが、教員が同時に直接指導できるのは一つの学年に限られた。直接教員の指導を受けることのできない児童は、課せられた問題を自分で解くことになるが、自習に集中できない様子が観察記録からうかがわれた。

授業形態は、一斉授業であった。教科書が不備な状況にあり、教員が所持しているプリントが唯一の教材であることが多かった。そのため、児童は、教員が黒板に書いた事柄をノートに書き写すことに終始した。しかし、ノートすら持ってきていない児童が低学年では少なからずいた。授業の効率性という点では、きわめて劣悪な状態にあった。

1991年の時点においてN小学校の教育活動がどのように変化してきたかを見るために、ある日の授業観察記録を掲載することにする。ここでは、5年生の授業を中心にして、一日の教育活動の展開をたどることにしよう。

- 7:10 制服を身につけた児童が次々と登校してくる。
- 7:20 国旗塔の前に整列した児童は、国歌を斉唱。学年ごとに教室に入る。一部の児童は、教室の清掃をする。
- 7:30 [以下、5年生の活動] 体育の授業は、バレーボール。L先生(男)がルールを説明したあと、試合が始まる。児童の服装は、制服のまま。全員が裸足になっている。
- 7:50 教室に戻る。児童は、隣どうして喋ったりして過ごす。教室の前方には女子8人のグループと男子7人のグループが座り、教室の後方には、男子4人のグループが座る。
- 8:15 英語の授業は、F先生(女)が担当。教科書を用い、マレーシア語を時折使いながらも英語で授業を進めようとする。教科書の文章(Clean up day of Sekolah Rendah Kebangsaan Kuala Mas)にある問題をF先生が板書し、児童が解く。
- 8:50 休憩。
- 9:00 算数の授業は、学年担任でもあるP先生(男)が受けもつ。教科書を用い、リットルとミリリットルという異なる単位の数量を加減する学習をする。P先生が黒板に問題を出し、児童はノートで計算をする。いくつかの問題は、指名された児童が黒板に解く。授業のあと、全員がノートを提出する。
- 9:20 休憩。ムスリムの児童11人は教室に留まり、ムスリムでない児童8人は別棟の図書室に移動する。
- 9:30 5年の教室では、ムスリム的な服装に身をまとったU先生(男)によるイスラーム教育。お祈りで授業は始まる。コーラン第2章(雌牛章)43節の読誦を学ぶ。教科書は用いず、U先生が準備した色紙に書かれたコーラン章句(アラビア語)の読誦を繰り返し練習する。

- (9:30) 図書室に移動したムスリムでない児童は、Z先生(女)の指導のもとで**道徳**の授業を受ける。Z先生の服装は、ムスリムの服装である。児童は、図書室にある各州(ヌグリ)に関する図書を選び、それを読んで各州の歴史と文化を学ぶ。Z先生は、時々児童に声をかけるだけである。
- 10:15 Z先生の授業は、何の指示もなく終わる。
- 10:25 鐘が鳴り、ほとんど全員の児童が教室の外に出る。男子は学校前の広場でサッカー、女子はゴム跳びをする者が多い。サバ財団配給の牛乳パックが配られ、それを飲む児童、家から持ってきたビニール袋入りの焼きビーフンを売る児童、それを買って食べる児童、様々である。
- 10:40 鐘が鳴り、児童は教室に戻る。
- 10:45 A先生(女)による**自然と人間**の授業。A先生は「マレーシアの天然資源」について試験をすると予告し、最初の15分間は試験勉強をさせる。試験開始から20分ほどで教室後ろの男子4人のグループを除いた児童がテストを終えた様子。騒がしい男子をA先生が注意する。
- 11:40 A先生が教室を出た直後に、R先生(男)が入室する。**マレーシア語**の授業は、言葉遊びである。三つのグループが競争する方式をとる。クロスワードパズルを書いた小さな黒板が立てかけられ、各グループから順番に一人ずつ解答しようとする。ベテランのR先生は、児童の興味関心を引き出すのが巧みである。二つの男子グループがそれぞれ10点、女子グループが30点を獲得し、女子グループの圧勝でゲームは終わる。
- 12:15 残りの時間は図書室へ行って自習するように指示をして、教頭のR先生は職員室に戻る。同じ頃、低学年の児童は帰宅の準備をし、次々と下校する。
- 12:45 先生たちも帰宅する。自宅が遠い先生は、オートバイを使用。

1973年と比較したとき、1991年における教育活動の顕著な違いとしては、第一に、複々式学級が解消され、同一の学年によって学級が編成される単式学級となったことがあげられる。さらに、クラス担当制ではなく、教科担当制がとられ、専門性をもった教員が授業を受けもつようになった。上の例でみると、一日の間に都合7人の教員が5年のクラスの授業を担当したことになる。

一日の教育活動を比較するために、図5を作成した。時間割で示されている授業と実際の活動を並べて表わした。時間割については、1973年と1991年のいずれについても、5年生のものを取りあげた。しかし、1973年の実際の活動として表わしたものは、必ずしも5年のものとは限らない。そのため、単純な比較はできないが、時間割にみる授業時間と実際の授業との間には、驚くべきズレが認められる。とくに、1973年の時間割は、実際に授業を行うにあたってど

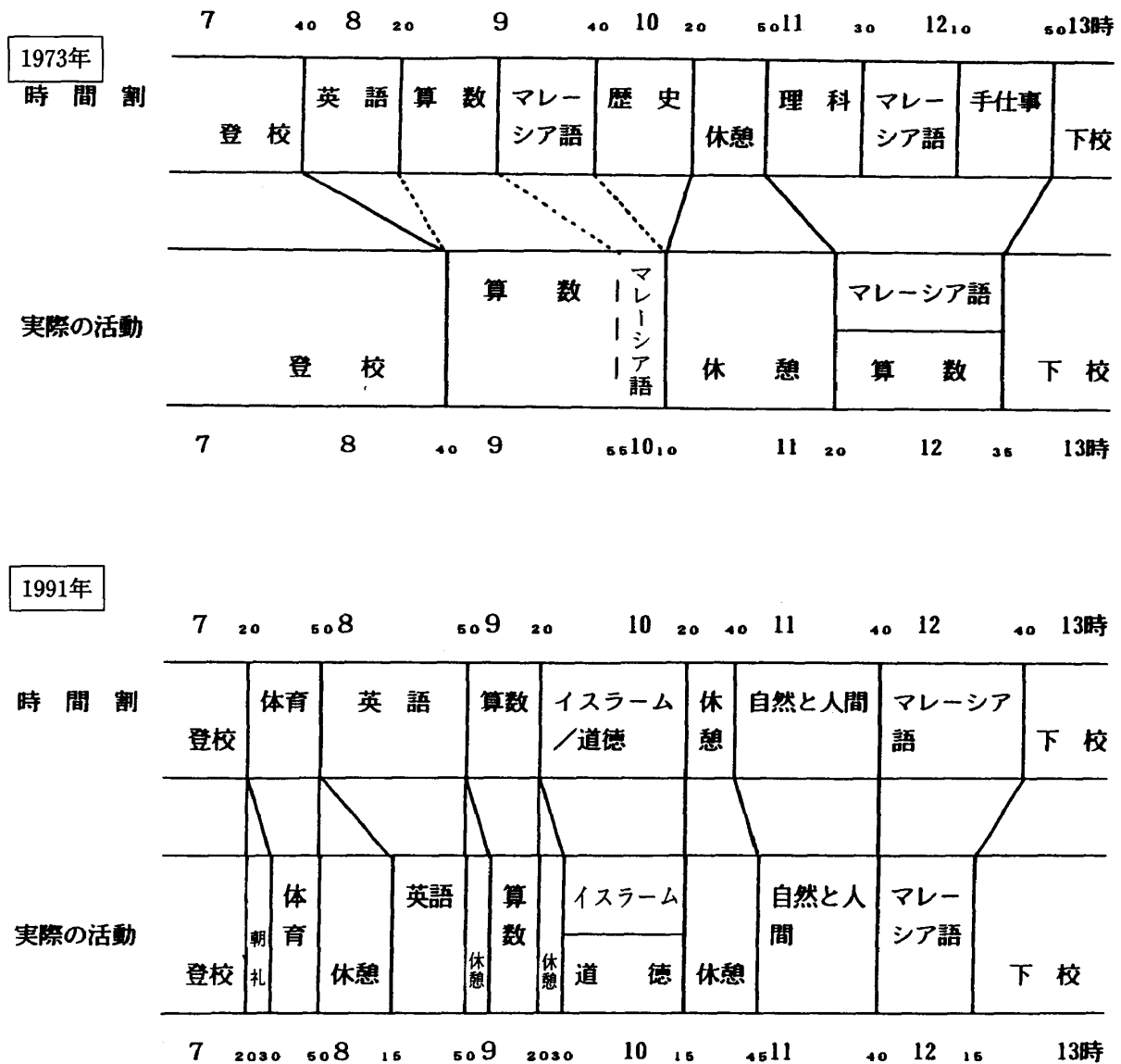


図5 N小学校一日の教育活動

れほど参考にされたか疑わしい限りである。1973年の場合、時間割に見る授業時間が4時間40分であるのに対し、実際に行われた授業時間は2時間45分に過ぎない。後者の前者に対する比率は、わずかに59%である。つまり、時間割の6割弱の時間しか授業が行われなかったのである。しかも、1973年の時点では、複々式学級が行われていたのであるから、一つの学年が教員の直接的な指導のもとで実施された授業時間数は、上の数値の三分の一になる。教育省レベルで発表されている週あたり授業時間数はいうまでもなく、N小学校の教室に貼られている時間割からでも、N小学校の教育の実態は明らかにされないのである。

一方、1991年の時間割にみる授業時間は5時間であるのに対し、実際の授業時間は3時間40分であった。前者に対する後者の比率は、73%である。18年前に比べると、授業の実施率は随

分と高くなっている。図5から分かるように、時間割で設定されている授業と実際の間のズレも比較的小さくなった。教科ごとに担当する教員が変わるため、授業の開始時刻と終了時刻を時間割通りに守る必要が起きていることも、ズレが小さくなった要因の一つであろう。

教育活動の変化としては、第二に、小集団学習の方式が導入されてきたことがあげられる。1973年の授業形態としては、一斉授業が主流をなしていたが、1991年の授業では、1983年に改訂された小学校教育課程で推奨されたグループ学習があらゆる教科で取り入れられていた。5年生のマレーシア語の授業に見られるように、小集団学習方式の導入によって、グループ内の協力原理とグループ間の競争原理が生かされていた。

第三の変化としては、教科書、教材の使用度が高くなったことがあげられる。マレーシア語、英語、算数、自然と人間といった主要教科については、教育省の所管にある言語書籍局(Dewan Bahasa dan Pustaka)で出版された教科書がN小学校の図書室に備えられ、児童は、1年間の期限で教科書を自由に借り出せるようになっていた。図書室には、教科書、副読本のほか、地球儀や理科実験器具などの教材、教具が教科別に保管されていた。

教育活動の変容を国民統合の観点から捉えるならば、ナショナル・カリキュラムに準拠してN小学校の授業が営まれるようになったことが重要である。授業の内容のみならず、教授学習方法や評価方法についても、マレーシア教育省の学習指導要領に基づいた教育をN小学校は行っている。クアラルンプールで出版されている教科書を使用するようになってきている点も、マレーシアの一体化を図る有効な手段として見逃せない。

おわりに

マレーシア・サバ州のキナバル山麓にたたずむN小学校。1973年と1991年の二回の訪問観察記録を手がかりとして、国民統合と教育というテーマに挑んできた。N小学校の変容、教室の変容、カリキュラムの変容、教育活動の変容のいずれからも、国民統合という方向性が明確なカタチとして認められた。N小学校の日々の営み、例えば、教室の掲示物、児童の服装、授業におけるグループ編成といった事項ですら、マレーシアにおいて1971年以降展開されてきた新経済政策（いわゆるブミプトラ政策）や1991年を起点に始められている国家開発計画（いわゆる2020年構想）の目標と連動している。N小学校が首都クアラルンプールから遠く離れた地域に位置するだけに、N小学校の日常的な実践とマレーシアの国民統合との関係の緊密さは重要である。むしろ、マレーシアの周辺に位置し、近隣諸国との距離が近いがゆえに、N小学校に課せられた国民統合という方向性に特有の意味あいが出てくるといえよう。

学校教育が国民統合の有力な装置となっているという事実は否定できない。N小学校の教育活動は、マレーシア語の普及、マレーシアの国教であるイスラームの浸透という面に強く機能

していることは本論で考察したとおりである。しかし他方、カダザン文化、カダザン語の継承発展、土着の宗教の保護育成という問題になると、はたして現在のN小学校の教育は、どのように機能しているのだろうか。マレーシアの道德教育の教科書を読み進めると、カダザン人の文化や慣習を題材としている箇所にてあうことがある。ただし、そこで記されているカダザン人の歴史と文化は、マレーシアの歴史と文化の文脈における扱いに限定されている。カダザン人の文化や土着の宗教は、N小学校のカリキュラムにおいて決して中心的なテーマではなく、マレーシア化あるいはイスラーム化の強力な動きの背後に隠れている。むしろ、カダザン語は教授用語から除外され、無視されている。教育における国民統合の強いうねりの中にあって、カダザン人の世界がいかにかに生かされるかは、多民族国家マレーシア、多民族社会サバ、さらには、N小学校に課せられた困難ではあるが重大な問題である。

参 考 文 献

- Cleary, Mark ; and Peter Eaton. 1992. *Borneo : Change and Development*. Singapore : Oxford University Press.
- Eggleston, John. 1977. *The Ecology of the School*. London : Methnen.
- Goodlad, John I., ed. 1987. *The Ecology of School Renewal*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Hairi Abdullah. 1989. Struktur Pendidikan : Masalah dan Prospek Dalam Pembangunan Tenaga Manusia. In *Integrasi Sabah*, edited by Hairi Abdullah, Zulkifly Mustapha and Fatimah Kari. Bangi : Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Hasbullah Mohd. Taha. 1981. Perkembangan Pelajaran di Sabah : Langkah-langkah Untuk Mengatasinya. *Seminar Pendidikan di Sabah*. Kota Kinabalu : Yayasan Sabah.
- 比較教育風俗研究会 (編). 1991-1992. 『研究談叢比較教育風俗』1-3.
- Ibrahim Saad. 1977. *Pendidikan dan Politik di Malaysia*. Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Kementerian Pelajaran Malaysia. 1983. *Kurikulum Baru Sekolah Rendah Buku Panduan Am*. Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Kementerian Pendidikan Malaysia. 1991. *Perangkaan Pendidikan di Malaysia 1989*. Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Laporan Tahunan*. 1988. Kota Kinabalu : Jabatan Pendidikan Sabah.
- Majin bin Ajing. 1980. Pelajaran di Sabah 1963-1973. In *Pendidikan di Malaysia*, edited by Khoo Kay Kim and Mohd. Fadzil Othman. Kuala Lumpur : Persatuan Sejarah Malaysia.
- 村田翼夫. 1989. 「マレーシア」『現代アジアの教育』馬越徹 (編). 東信堂.
- 西村重夫. 1973. 「ナポン村での12日間——子どもたちとの触れ合いを通して」『北ボルネオ踏査報告書』広島大学体育会ワンダーフォーゲル部.
- Nor Long, Mohd. 1982. *Perkembangan Pelajaran di Sabah*. Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Omar bin Mohd. Hashim. 1981. Sepuluh tahun pertama pendidikan di Sabah masalah dan cabaran. In *Sabah History and Society*. Kuala Lumpur : Malaysian Historical Society.
- Ongkili, Maximus J.; and Chin Poh Choo. 1987. Keberkesanan Dasar Pelajaran Kebangsaan Dalam Peningkatan Mutu Pendidikan di Negeri Sabah. In *Konvensyen Mutu Pendidikan Negeri Sabah*. Kota Kinabalu : Yayasan Sabah.
- Orr, David W. 1992. *Ecological Literacy : Education and the Transition to a Postmodern World*. Albany : State University of New York.
- Persekolahan di Sabah Tahun '76*. n.d. Kota Kinabalu : Bahagian Kajilidik, Ibu Pejabat Yayasan Sabah.
- Salleh Lebar, Mohd. 1992. *Perubahan dan Kemajuan Pendidikan di Malaysia*. Kuala Lumpur : Nurin Enterprise.
- 杉本 均. 1989. 「マレーシア新初等教育カリキュラム——もとめられているものと目指すもの」『比較教育学』15.